

くいひよりて聳とせり、繼直出居のかたわらに、休所かまへて、かねて召仕べき者もあり、妻の住べき所は、奥にいらりてあり、妻いたりて三箇夜の後の、めのとだつ者めし出て、我今まで妻なき事は、思ふ所有故也、せばき家の内こそ、ひいな様の、夫婦ならびあらずしても叶はぬ、我小身なれども、内外のへだて有か、る程の人は、夫婦賓主のごとくあるべし、互に用意なくては見ゆべからず、へだつとおもひ給ふな、妾などは主とすれば、おのづから常の用意あり、妻はさもなければ、なれすぎたが、ひの心のおくも、かくれなきやうに成ては、互にうとむ心も出来なん、且我につたなき性有て、不仁無禮の心、かたちを悪む心有、とりわき不慈のいかり、不仁の事などあれば、世の中のけがれをいとふ様にて、思ひなおしがたし、氣にぶくて、我身のあやまちをだにたゞしえざれば、まして人の悪をたゞす事もむづかしといひきかせて、物むづかしくては、奥に入、可入ときはかならずせうこそせり、妻のこゝろむづかしき時は、めのと出て不例のよしを傳ゆ、もし奥に不仁、奢りの事などあれば、其多少によりて、一句、二句、三句もいたらず、おりくせうそののみあり、それと人の過をあらはしがほにはあらで、書に見かゝりてとなどいひ、あるは武事のはたすべき行ありてなどまぎらはすれど、心の鬼は、ゑるべく、たしなみもてゆくほどに、あしき習ひなどは、跡なくきへうせて、上らうしき心をきて作りいでぬ、此男道學武藝はいふに及ばず、歌の道絃管の遊びもいとよくて見るにあくべき人ならねば、妻もおなじく心に入てしなせり、生れ付すぐれたるにはあらねど、下地おほどかにて、上らうと作りなすべきには、あまる所ありければ、ゑなよくもてつけて、花の朝、月の夜などには、時にあひたるしらべ共にて、あらまほしきあはひに成けるとなん、

〔三のゑるべ上〕古事記、八千矛神の後の歌よみしたまふ段に、爾其后取大御酒坏立依指擧而歌曰、
略○中此歌のこゝの意は、汝命こそは男にてませば、いづくにもいづくにも、遺る處なく妻を持って